

大蔵海岸での自主トレ中、僕の携帯へ入った着信。その電話が僕の人生観を変えるものだと知らず、僕は受話器のボタンを押した。・・・「フィリピン遠征のメンバーに選ばれました。」

1月2日、空港のロビーに6時30分に到着。小型ジェット機PR407のジェット噴射が開始された時、僕の心はフィリピンへと飛んだ。目が覚めると既に飛行機は着陸態勢に入っていた。異国の地マニラに到着。携帯もしっかり「圏外」を表示している。外へ出るとそこは灼熱の地であった。空港からホテルへの移動中、車が停車している時、子供を抱え物乞いをする母親が窓をノックした。フィリピンの貧富の差はこれほどあるものなのか・・・、と驚愕した。それに比べると日本はフィリピンほど貧富の差はないのかなと思った。確かに日本にもホームレスというお金が無い人はいる。しかしホームレスは働く気力が無いからお金を持っていない場合が多く、それに対しフィリピンの人たちは働きたくても働けない貧しい人がたくさんいるのだ。そんな複雑な思いを胸にホストファミリーの人たちと対面した。いよいよ僕の英語力を試すときが来たのだ。僕は英語が得意だが、実際に外国の人と話した経験は殆ど無い。「語学力の向上」もこの遠征の目標の一つだ。いざホストファミリーの人と話してみると、想像以上に通じる。英語の楽しさ是这样なものなのかと実感した。

次の日からフィリピンのジュニア達とタフマッチをした。フィリピンのジュニアは一球一球のボールはとてもパワーがあつて上手いが、1ポイントへの集中力や丁寧さは兵庫チームの方が一枚や二枚上手だった気がする。それは、兵庫チームが大差で勝利したことからもわかる。しかしこのタフマッチは、試合を通じて親睦を深めるものでもある。日が経つにつれて僕は少しずつ親睦を深めることが出来た。それがこの遠征のいわば一番の目的であると思うし、僕の「語学力の向上」にも繋がるのだ。ホストファミリーの人たちはとても優しく接してくれた。これがフィリピンの文化の特徴である「Hospitality(おもてなしの心)」だなと感心した。英語も僕たちに分かりやすい文章表現を使ってくれて、とても話しやすかった。

そして迎えたマニラ最終日の「Farewell Party」。僕たちは一人一人スピーチをしてとても盛り上がった。皆、笑顔だったけれど、どこか悲しげだったような気がする。ホストファミリーは僕のスピーチに「Good speech!」と褒めてくれた。中学3年間ずっと英語を頑張ってきて本当に良かったと思った瞬間だった。

次の日、飛行機で2時間足らずで南東の島、セブへ足を踏み入れたのだ。マニラよりも若干赤道に近いせいか、セブの方が少し暑い気がした。今回はマニラでの経験を活かして、話すときは「Yes」「No」だけではなく、そこから何か会話が盛り上がるような工夫をしようと努めた。その成果としてマニラよりも早い段階で、セブの人たちと仲良くなれた。

翌日からセブの人たちとのタフマッチがあつた。セブのジュニアたちもマニラ同様、少し粗いプレースタイルだったが、マニラの選手よりは1球に対する集中力は高かったのだ。かなり手ごわくて、とても良い試合経験をさせてもらった。

兵庫チームの仲間の試合観戦中、ある発見をした。それはマニラとセブの応援のし方の違いである。マニラは自分のチームにはもちろん、対戦相手のナイスショットにも拍手を送る。しかし、セブは自分のチームにしか拍手をせず、おまけに相手のミスショットにも喜んで拍手をしているのだ。同じ国の中であるのに拍手一つでもこんなにも違うのか、と驚いた。僕たちもマニラの応援のし方は見習うべきだと思う。対戦相手にも拍手を送る、これは僕が学んだスポーツマンシップの「対戦相手を尊重する」という気持ちの表れだと思う。

そして迎えたフィリピン最後の朝。いつもと何も変わらずに時は過ぎていくのに、僕の心はどこか寂しい気持ちでいっぱいだった。空港までのバスでの移動中、僕はこの遠征を振り返ってみた。

思い返せばこの10日間いろんな出会いがあり、別れがあつた。その中で僕は色々なことを経験した。貧富の差、英語が通じたこと、セブとマニラの文化の違いなどここには書ききれないほどたくさんある。それらは僕の人生観までも変えてしまうといっても過言ではない。この経験を通じて感じたこと、考えたことは遠征が終わると共に消し去ってしまつてはいけない。今後のテニス活動ではもちろん、将来社会に出るときにも絶対に忘れないようにしたい。そしてこの経験を次の世代にも伝えようと思う。それがフィリピン遠征選手に選ばれた僕の役割だとも思う。

「次の世代にはまず語学の勉強をしっかりしてもらって、フィリピンの方と不自由なく話せるようにしてもらいたい。もちろんハードに通じることもあるが、親睦を深めるにはやはり言葉が重要だと感じた。そしてこの歴史あるフィリピン遠征に行かれた方々が築きあげてきた伝統を壊すことなく、楽しんできてもらいたい。」

そんな事を考えながら僕はフィリピンの地をあとにした。

最後になりましたが、今回の遠征に同行してくださった、坂本会長、古田コーチ、山本コーチ、新聞記者の小川さん、準備してくださった兵庫県テニス協会の方々、ホストファミリーの方々、フィリピンのジュニアたち、兵庫チームの仲間たち、そして今まで僕をサポートしてくださった数多くの方々に感謝の意を表します。

